Features

国立劇場の思い出

高橋 嘉市

❒国立劇場が、令和５年（2023）10月29日に建て替え工事で閉場する事になった。

開場が昭和41年（1966）10月であるから、57年余りである。

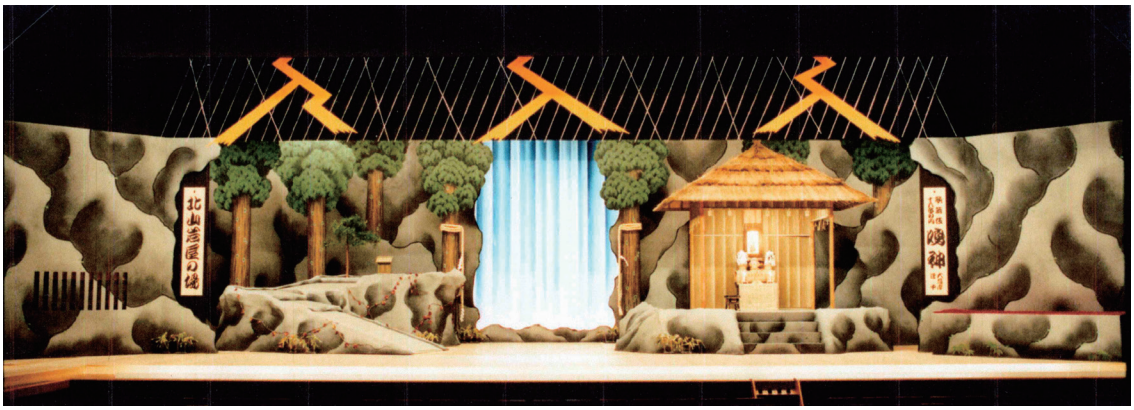
私が入職したのは昭和41年（1966）10月で、翌月の11月が開場記念公演として６日から27日まで歌舞伎**「菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）」**第一部が上演された。

開演時間が５時15分で終演時間が10時過ぎの予定であったが、大幅に遅れた記憶がある。これは出演者の熱演と大道具はじめ裏方スタッフの、開場公演を成功させたいという意気込みがもたらしたものであると思う。

私が初めて歌舞伎に直接関わった第一歩である。

その後、国立劇場で上演される数々の歌舞伎・文楽・能・雅楽・声明・日本舞踊・邦楽など伝統芸能に携わる機会を与えられた。

その多くの作品の中から私の印象に残ったものを紹介したい。



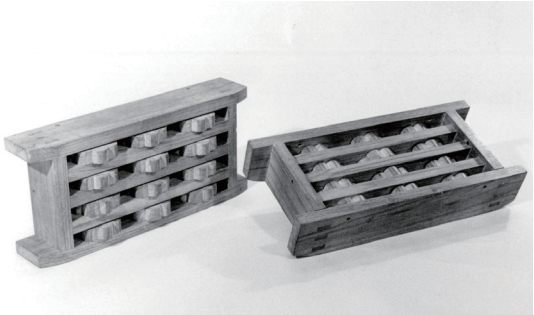
鳴神『北山岩屋の場』　独立行政法人 日本芸術文化振興会提供

❒『鳴神不動北山桜』<鳴神>

この物語は、時の天皇が皇子生誕の祈祷に功のあった鳴神上人に、堂塔を建立する約束をはたさなかったことが発端となっている。

この北山に雨を降らせるために鳴神上人を泥酔させ、そのすきに竜神を閉じ込めていた滝壺の〆縄を切る。たちまち雷鳴が轟き渡り大雨を降らす。

この時の雷鳴は、下座中で鳴物さんが大太鼓で雷と雨音とイボ銅鑼で稲光の音を出し、舞台裏では**「雷車」**と言う擬音具で雷の音を出す。



雷車

この雷車は舞台の裏で床面(木材)を共鳴体としてゴロゴロと転がし雷鳴の音を出す。この雷車の通る道を雷道と言って何人でもこの道を邪魔してはならない。

また、この雷車を持ち上げ床面に打ちつけて落雷を表現することもあるが、これは体力的にかなりの力を要するため腕力を蓄えておかなければならない。

今の私にはとても無理だと思う。

❒『義経千本桜』<道行初音の場>

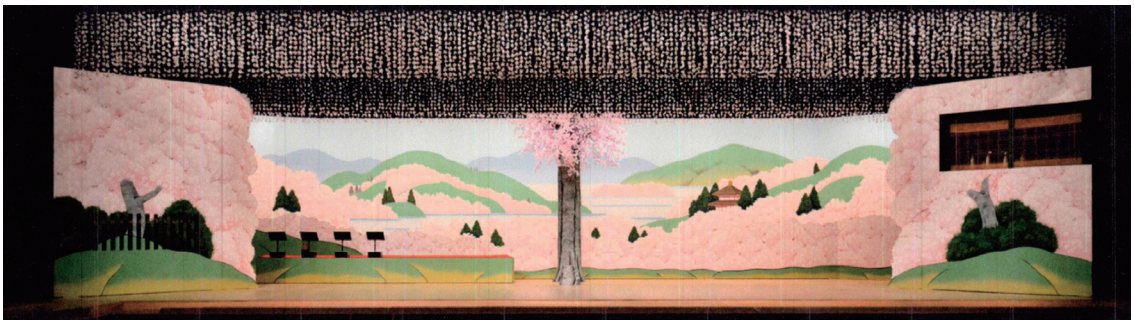
昭和43年(1968)　4幕目文楽座特別出演

豪華な出演者メンバーの中で、恐れもせずに良く舞台を務めたなと今さらながら思う。

静御前が4代目中村雀右衛門、源九郎狐(忠信)が3代目市川猿之助、文楽座の人形遣い吉田玉男、浄瑠璃が8代目竹本綱大夫ほか、三味線は10代目竹澤弥七等のメンバーで良くひと月間、ひたすら「鶯」を鳴かせたと思う。その頃は与えられた役割を精一杯務めるのが自分の務めだと思っていた。

舞台は一面に所作を敷き、桜の吊り枝、桜の立ち木、ひとめ千本桜の吉野を見渡した遠見、すべて桜花絢爛の吉野山の舞台風景である。

舞台の幕が開くと、静御前が義経を慕って登場のところで擬音笛による**「鶯笛」**で谷渡りの鳴き声が聞える。ホーホケキョ　ケキョケキョ‥‥と、のどかな情景描写が要求され、



義経千本桜『吉野山道行』　独立行政法人 日本芸術文化振興会提供

鶯の声で静御前の心がほぐれる様に聞かせる。

鶯笛

しかし擬音笛を吹く効果マンはキッカケを三味線の音でとるため、三味線の音を聞き逃さないように細心の注意を払っていたにも関わらず、まさに吹こうとするキッカケの直前に私の背中をたたき呼ぶ人がいた。故意にタイミングを外させようと邪魔する人達がいた。

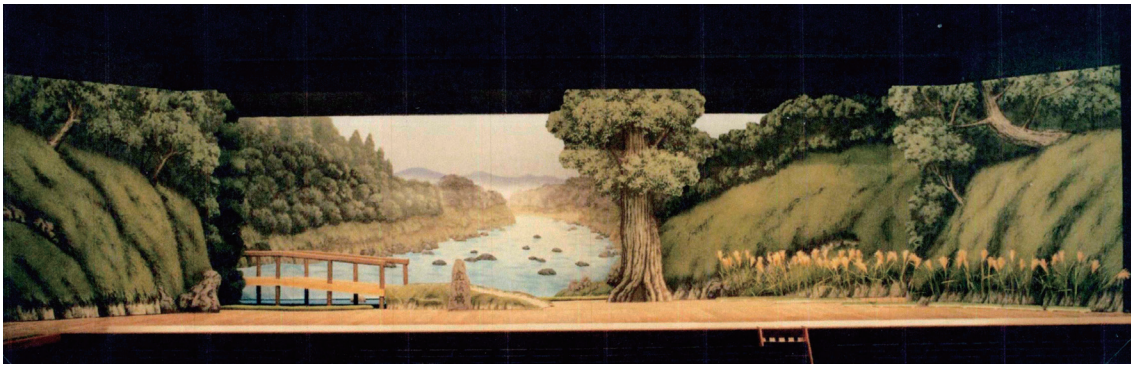
今考えると、その人達の仕事を奪ってしまうかもしれないと危機感を抱かせていたのかもしれない。

当時は大部屋で「三階(さんがい)さん」と呼ばれていた人達がいて、擬音を得意とする人が生計の一部としていたからである。

❒『修善寺物語(しゅぜんじものがたり)』

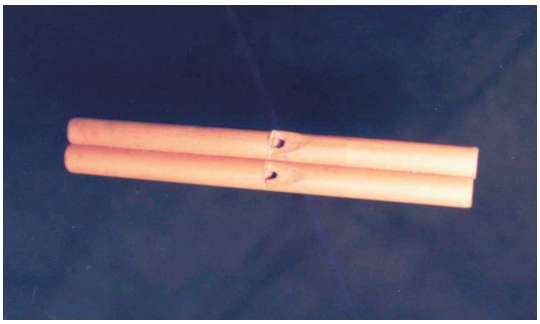
歌舞伎の世界では擬音具**「虫笛(むしぶえ)」**が良く使われる。虫(むし)の音(ね)は秋という季節感を醸し出し「別離の悲しみ」「孤独の寂しさ」「静かな心の幸せ」などの情緒を生み出す。

岡本綺堂作『修善寺物語』＜桂川のほとり虎渓橋のたもとの場＞では、すだく虫の音が舞台一面から聞こえている中、花道から頼家と夜叉王の娘桂(かつら)が登場するシーンがある。二人が舞台にさしかかる所で幸せの一時を切断するように虫が一斉にピタリと鳴き止む。虫の音が暗闇の中に消滅した沈黙の世界は、その後の二人の悲劇を象徴的に表している。また泉鏡花**『婦系図(おんなけいず)』**の終幕で初代・水谷八重子(みずたにやえこ)



修善寺物語『虎渓橋のたもとの場』　独立行政法人 日本芸術文化振興会提供

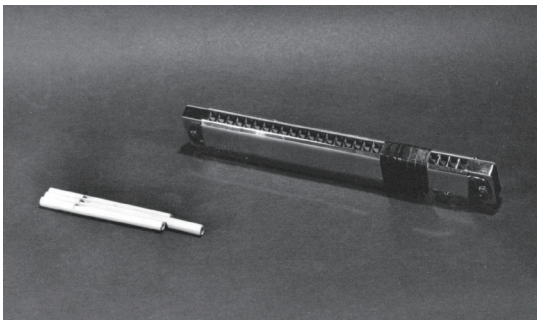
の扮するお蔦が今まさに息を引き取ろうとする場面では、一匹のキリギリスが今にも死にそうな鳴き声でか細く鳴いている。



虫笛

坪内逍遥作『桐一葉』でもやはり終幕に虫が鳴く、どんな苦境にも涙を見せなかった片桐且元が、落城の迫った大阪城を前にして思わず泣く場面などでコウロギの虫笛を吹いた。『元禄忠臣蔵』＜赤穂城門外＞では８代目松本幸四郎の大石内蔵助と三代目・實川延若が扮する伊関徳兵衛の両者の無言のやり取りの間、「地虫」を「ジー」と息の続く限り吹き続け、切れたところで内蔵助が初めて復讐の決意を明かすシーンが今でも鮮明に残っている。この地虫は虫笛の先端に水たまを作り、しずくが落とさないようにひと月通して鳴いた。とても苦労したが効果担当の私は達成感を味わった。

また、『修善寺物語』や『桐一葉』では歌舞伎独特の擬音具「ハーモニカ」によるヒグラシの鳴き声も懐かしく思い出される。



ヒグラシの音を出すハーモニカと笛

昭和44年（1969）11月歌舞伎『椿説弓張月』では国立劇場大劇場公演が終わって数か月後、杉並公会堂（杉並区）にあるホールで客席と舞台を借り切って日本コロムビアが録音することになった。

三島由紀夫作・演出『椿説弓張月』をレコード化するための収録である。その収録時に私の未熟さ故に録り直しになったことがあった。

三島由紀夫作・演出の「椿説弓張月」＜上巻＞伊豆の国大島の場を脚本読みによって演出意図を耳から聴き取ってほしいと、劇中の台詞を三島由紀夫氏が一人で語るCDである。

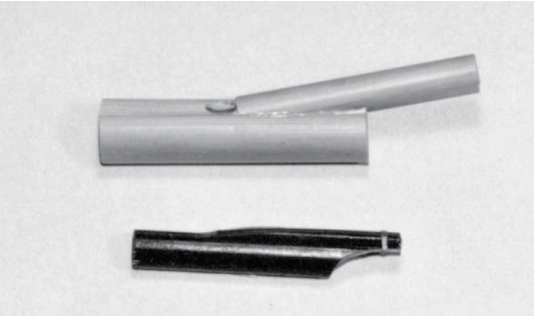
マイクのテストチェックが終わり「本番いきます」の掛け声が一面に響き渡る。

緊張感の漂う中で、三島由紀夫氏が客席の真ん中に陣取っている。

私と中村準一（国立劇場初代音響係長）氏の二人が擬音効果を担当する。

＜すべて伊豆国大島の体＞

二丁柝、笛の壱声。大小の鼓そして大太鼓による波音が入り柝が刻み込んで行く、止め柝となり床の浄瑠璃が始まる。置浄瑠璃となり漣波の音がドンドドド‥‥と続く、擬音具「千鳥笛」による千鳥が「ピッピッ」「ピッピッ」と鳴く。二人は上手・下手に分かれて鳴き、



千鳥笛

三島由紀夫氏の眼目となる台詞が始まった。

私は上手の千鳥笛を担当するが、本番で鳴き声に遠近をつけようとマイクから離れすぎて進行途中でNGとなり、録り直しとなった。

私一人のミスで三島由紀夫氏初め皆さんに迷惑をかけて申し訳なかった。

私は邦楽演奏にも多く携わったが、邦楽の演奏は元来、唄・三味線・お囃子など生演奏で聴かせるものである。

しかし現代では、会場の大きさや場所などの条件によって音響担当者の協力が必要になってきた。

従来、唄方にマイクロフォンを立ててPA(パブリックアドレス)することはタブーの世界であったがSR（サウンドリインフォースメント)することで観客に意識させず聴かせる事ができるようになった。

私は邦楽の演奏会や日本舞踊の地方(じかた)には特に意識をもって対応している。

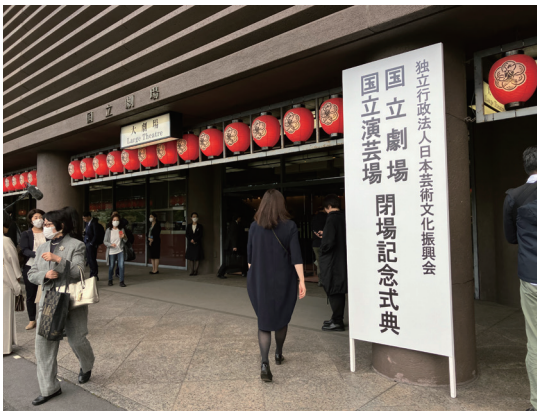
女性の唄方(うたかた)にはマイクを使用し、男性の唄方とのバランスをSRすることに神経を注いだ。

求める目的によって違いはあるが、例えば日本舞踊公演でのお客様は立方(たちかた)の踊りを楽しむための目的が第一であり、音だけを求めてはいないのが一般的である。私は聴覚的・視覚的にも踊りの邪魔をしないようコンタクトマイクやWLマイクを取付け、お客様に余計な神経を使わせないようにした。

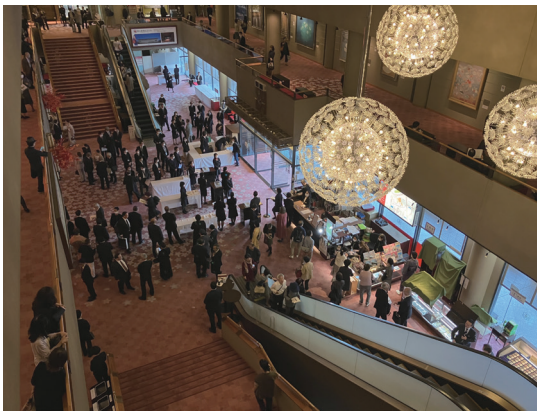
特に新作の場合、男女問わずSRすることが多い。何故なら何を唄っているか歌詞が不明瞭だと上演の意図が伝わらないからである。場合によっては、楽器も音楽的バランスをとるためSRを行うこともある。

国立劇場・昭和41年(1966) 10月開場から令和５年(2023) 10月の閉場まで57年、私は人生の大半は国立劇場と共に過ごしたことになる。

国立劇場は私に「音(おと)」とは何かという事を様々な場面や試練を通して教えてくれた。この「音」たちに育てられ生涯の仕事として与えられたことに感謝している。



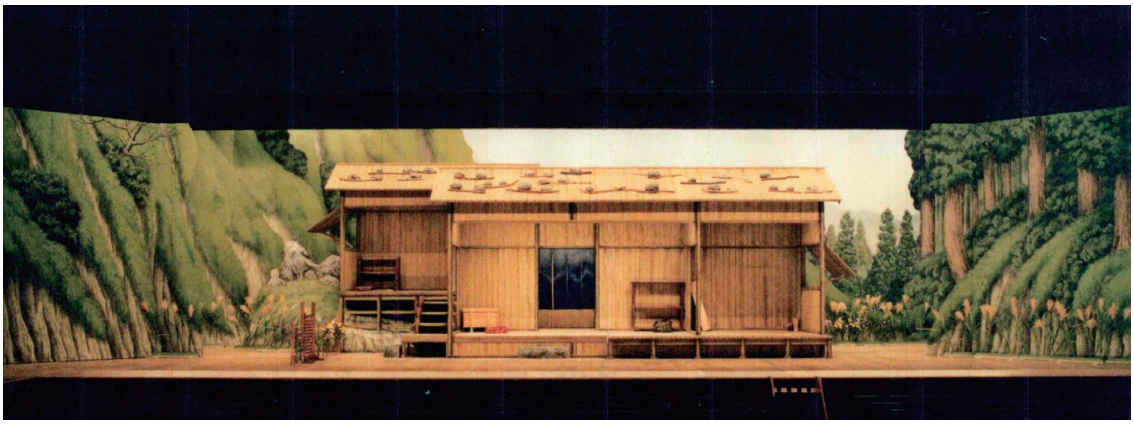
閉場式典の立て看板



閉場式のロビー

楽屋入口と出演者駐車場

閉場式典後の名残を惜しむ人々



修善寺物語『夜叉王住家』　独立行政法人 日本芸術文化振興会提供

Information

J.TESORIの新しいセミナー

J.TESORI Sound Workshop（JTSW）を開始して11年目に入る株式会社J.TESORIが、新たにオンデマンドによる聴覚のトレーニング・プログラム「JTSW Ear Training オンデマンドトレーニング（JET）～ビギナーコース」を行います。

これは自習型の聴能形成訓練で、受講者は自由な時間にサーバーにアクセスし、音源をヘッドフォン等で試聴し、音の大きさ、音の高さ、音色などの聴き分けトレーニングを行うセミナーのビギナーコースです。

【セミナーの概要】

・期間：2024年２月15日（木）～ ５月14日（火）３ ヶ月間
・形式：オンデマンドによる自習トレーニング（初回と最終回のみ、講師によるオンライン解説有り）
・教材：トレーニング内容や受講手順等を記載したPDF、技術解説レター（メール配信、不定期）
・講師：J.TESORI代表 栗山譲二
・費用（税込）：22,000円